

## はじめに

1945（昭和20）年、先代の伊藤正一が魚網機械を通じた戦後復興を目指して創業した伊藤製作所は、今年で73年目を迎える。魚網機械の消耗部品であるシャトルはニッチな製品であったが、当社は世界のシェアをほぼ独占していた。

私は大学を卒業し、創業20年目の65（昭和40）年に入社した。直後、親父は「この仕事の技術程度なら、台湾や韓国にやがて取られてしまう。お前は魚網機械部門の仕事はしなくてよい。精密プレス金型製作に専念しろ」と命令した。さらに、「その時代の要求に答えられる技術力を積み上げていけば、会社はいつまでも存続できる」と。金型技術の何たるかを余り理解していな

伊藤製作所社長

## 伊藤 澄夫 1

かった親父だが、現在の姿を予測しているかのような先見性だった。

私は86（昭和61）年、社長に就任した。職人肌の親父は現場作業が好きで、それ以前から経営に関する業務は全て

私に任されていた。そのため経営の引き継ぎは極めてスムーズにできた。

「社長は大変でしょう。寂しくはないですか。苦勞も多いでしょう」とよく問われるが、現在まで何の苦勞もトラ

## 仕事は趣味の延長線上に

ブルもなかったと答えている。

運が良かったのか、人様に恵まれたのか、私の性格が楽観的なのか。同様に会社も大きなピンチもなく、緩やかに成長できたことに喜びを感じて

いる。ただし、2002（平成14）年、私の生涯で唯一最大のピンチがフ

イリピンで発生したが、このことは後に紹介したい。

私は「仕事は趣味の延長線上にある」と常々申し上げている。国内外で多くの皆さんと知り合えたのは、仕事以外で費やす時間が多かったからだろう。

今回、半生を振り返る機会をいただきたいが、私のマイウェイが少しでも皆さまのお役に立てれば幸いである。



筆者 近影

マイ  
my way  
ウェイ